

● 奥州屈指の格式を誇る戦国大名

約500年前の戦国時代、当時、東北北部最大の戦国大名として君臨していたのが三戸南部氏です。南部氏一族は青森県全域から岩手県中部・秋田県鹿角地方へも勢力を伸ばしていました。

その頃の本拠地であった聖寿寺館（小向地区）では、近年の発掘調査により東北地方の戦国史を一新するような新事実が明らかとなりつつあります（1）。

聖寿寺館跡は馬淵川（まべち）の左岸（上流から下流を見た左側）、奥州街道と鹿角街道が交差する交通の要衝に位置しています（2）。曲輪の北、東、南は3本の直線の堀で「コの字形」に区画され、イメージ的には戦国時代の「城」というより、室町時代の「守護居館」に近く、令和2年（2020）の調査では曲輪北東部に1辺100メートル四方の武家居館と考えられる方形区画も新たに確認されました（3）。当時、室町幕府の足利將軍邸を頂点とする権威の象徴でもあった「方形居館」を南部氏一族の中で三戸南部氏だけが導入していたことは興味深い事実です。

この三戸南部氏の中央志向を端的に示しているのが、平成30年（2018）に出土した安産祈願のお守りと考えられる犬形土製品です（4）。国内の出土傾向から都周辺で生産されたと考えられますが、関東・甲

信地方には見られないことから、南部氏が日本海経由で都と直接交渉を持っていた証拠と考えられます。南部氏当主が上洛の際、奥方のために求めたお土産かもしれません。

● ブランド化されていた「戸立の馬」

犬形土製品は東北地方では4点の出土が確認されており、南部氏と上杉氏、伊達氏の城館で出土しています。この東北地方を

代表する戦国大名3者の共通点は、任官などで室町幕府と交渉を行うために、京都直通のチャンネルが必要だったということです。犬形土製品との関連は不明ですが、天文8年（1539）7月、24代南部彦三郎（5）は上洛し、馬を献上した際、室町幕府12代將軍足利義晴に謁見し、「晴」の二字を与えられ、南部晴政と改名しています（『大館常興日記』）。当時、地方の有力領主たちは、領国支配に室町幕府の権威を利用するため、上洛の際に將軍へ馬などを献上し、名前を二

● 小特集

国史跡・聖寿寺館跡が語るもの

南部町教育委員会社会教育課史跡対策室 布施和洋



1 聖寿寺館跡発掘調査区。背後に見える山は名久井岳



2 聖寿寺館跡空撮写真（北西から）



3 方形区画南西角の溝跡

字賜ることもありました。晴政と同様に將軍義晴から「晴」の字を与えられた戦国大名の中には、伊達政宗の祖父・晴宗や武田晴信（信玄）、上杉謙信の兄・長尾晴景が見えます。

当時の南部氏の主要産業は馬の飼育でした。特に青森県東部から岩手県北部にかけては「戸」の地名が残っていますが、「戸」で生産された馬は「戸立の馬」と呼ばれ、都で数倍の価格で取引されました。聖寿寺館跡でも南側の堀跡から複数の馬の骨が出土しています（6）。都の貴族の日記には、応永25年（1418）8月10日、「関東大名南部上洛。馬百疋。金千両室町殿へ献之」（『看聞日記』）とあり、聖寿寺館の13代南部守行が4代將軍足利義持に馬100頭を献上したと考えられています。

馬は現代で例えるならば乗用車です。馬の焼き印はさながら「車のエンブレム」のようなもので、車1台の価格が200万円とすると、その数倍の1千万円クラスの高級外国車の生産工場がこの地に複数存在したようなものです。

さらに、それぞれの「戸」によって馬の焼き印は異なり、ブランド化されていました。現代に例えると、二戸が「ベンツ」、三戸が「BMW」、三戸が「ボルシェ」、四戸が「フェラーリ」のようなイメージで、守行の馬100頭の献上は、さながら「ベンツ」100台を連ねたパレードを都の大通りで開催したようなものでした。

うなものでした。

● 東北最大級、最大規模の発掘が相次ぐ

聖寿寺館跡では、高級馬の返礼品とも考えられる大陸産の高級陶磁器が大量に出土しています。中でも瑠璃色の水差しは極めて貴重で、国内では沖縄県の首里城と青森県の聖寿寺館跡の2例しか確認されていません（7）。

さらに、中央の情報をいち早く入手していた三戸南部氏は、15世紀末から16世紀前半にかけて、聖寿寺館を大改修し、最新設備を導入していたことが近年の調査で明らかとなっています。特に「館の顔」ともいえる出入口は、全国的にも早い段階で通路を2カ所直角に折り曲げる構造の「枡形虎口」に改修した上、東北最大の版築土



4 犬形土製品



5 24代南部晴政（もりおか歴史文化館所蔵）



6 馬顎骨出土状況



8 東北最大級の門柱跡



7 聖寿寺館跡瑠璃釉水注（右）
北京市出土瑠璃釉水注（左）

橋、東北最大級の門（8）を構築しています。また、城館中心部では東北最大規模となる掘立柱建物と2階建てと考えられる特殊建物なども建設していました。中心建物の大型化からは、津軽制圧後の家臣団の増加が読み取れ、三戸南部氏が戦国大名化していた様子がうかがえます。